

実践研究

身体計測の観察から学生は何を学ぶのか — 地域子育て支援センター「くれまちす」における活動から —

大 西 薫

岐阜聖徳学園大学短期大学部

What do students learn from the observation of physical measurement practices? Activities in a regional child-rearing support center

Kaoru ONISHI

キーワード：地域子育て支援センター 身体計測 1年生と上級生 ロールモデル 正統的周辺参加

I. はじめに —研究の背景—

1. 研究の背景

2015年4月から実施されている子ども・子育て支援新制度では、子育て家庭の負担感や不安の軽減を図るとともに、保護者が安心して子育てできる社会の実現を目指した取り組みが行われている。その内の一つとして、地域子ども・子育て支援事業では、利用者支援や地域子育て支援拠点など、地域の子育て家庭への支援を目的とした事業が実施されている。それを受けて、岐阜聖徳学園大学・岐阜聖徳学園大学短期大学部では、岐阜市からの要請を受け、地域子育て支援センター「くれまちす」（以下、「くれまちす」とする）が2016年4月に岐阜キャンパス内に開所された。

筆者は、「くれまちす」内で月に1回、地域の子どもたちを対象とした身体計測を学生とともにしており、その活動の一部を報告してきた¹⁾²⁾。そこでは、保護者から離れたくないと思う子どもに学生が対応する難しさがあった反面、計測を嫌がる子どもに対して保護者と学生が一緒になって説得したり、あやしたりする姿が見られた。身体計測の場が学生と保護者との自然な関わりを促進していると考えられ²⁾、「くれまちす」が保育実践の学びの場として機能していることを示した。このような実践を通して、子どもへの身体計測は保健技術だけでは適切な対応ができず、子どもたちを楽しませるための援助技術（手遊び、素話、作品作りなど）や保護者対応が必要となることに学生自身が気づき、次の実践につなげようと工夫をする姿も見られた。

このような学生が参加する地域の子育て支援活動の実践報告においては、保育者養成校が実施主体となっている地域子育てセンター運営の例が多くなっている³⁾。これらの実践例からは、通常、受け身になりがちな講義形式の授業とは異なり、子ども・保護者と直接かかわる中で、学ぶ主体である学生が活動を通して考え、行動することが必要であるとされている。「くれまちす」における実践活動は、このような提言に即した活動であるといえよう。「くれまちす」への参加学生は、身体計測を実施することを通して、授業で行う実習とは異なる生の生活の文脈において、どのように調整しながら自己の活動を遂行していくかを試行錯誤しながら学んでいた。一方、実際に参加している学生は以上のような学びをしていたのであるが、そこに同席し、上級生の活動を観察していた学生もいた。その学生達は、上級生の活動を観察することを通してどのようなことを学んでいたのだろうか。

そこで、本研究では、身体計測の活動を1年生が参与観察することで、何を学び、感じるのかを明らかにすることを目的とする。短期大学部における2年間の保育者養成課程の中で、上級生が何を学び、それが実践の場でどのように活かされているのかについて知る機会は、卒業論文発表会などの場や、初めての教育実習をする前に先輩から話を聞くという交流（90分）程度でしかなく、上級生が子どもと触れ合っている様子や、授業で学修した内容を生かした取り組みを1年生が観察できる機会はほとんどない。また、2年生にとっても、自分たちがどのように学修を積み重ねてきたか実感する機会は乏しく、学生

の言葉を借りれば「与えられた課題をこなすことで精一杯」という課程において、「自分がこれだけ成長できた」「去年の今頃、自分はこんなだった（でも、今はもっと出来るようになっている）」と感じられる機会は、重要であると考える。

本稿では、実習未経験の学生（1年生）が先輩学生が行っている身体計測場面の参与観察を行った記録を分析する。参与観察において、1年生は先輩のどのような姿に着目しているのかについて、学生の振り返りレポートから整理する。そして、1年生が自分自身の活動をどのように振り返るのか、その特徴について、学生がロールモデルとしての先輩の姿から何を学び得たのかを検討する。

Ⅱ. 研究方法

1. 授業科目・対象学生・身体計測の参与観察に関して

授業科目は「基礎セミナー」であり、受講学生は短期大学部幼児教育学科第一部1年生10名である。実習未経験である対象学生は、実習（教育実習・保育実習）経験のある上級生（2年生：12名）が行っている身体計測場面に同席し参与観察を行った。教員から、「先輩が行っている身体計測の場면을観察にあたり、先輩が子どもたちや保護者にどのように関わっているかに注目すること」「できるだけ子どもたちや保護者の方と触れ合ってみること」と教示された。1年生は入学して間もない時期から『くれまちず』に行ってみたい」と希望する積極的な学生たちであった。

身体計測は、本学では2年生後期に「子どもの保健Ⅲ」の中で学修する内容である。今回の参与観察の時期は1年生前期ということもあり、「これから2年間で保育に関する勉強をしていくのだから、分からないことが分かるためにも、まずは実際に子どもたちと触れ合ってみよう」、と教員から述べ、身体計測に関する保健の知識について事前に学修はしなかった。

身体計測を実施する2年生に対して、1年生が身体計測場面の参与観察を行うことを事前に伝えた。

2. 観察実施日と実施場所

実施日は、2018年前期の6月及び7月の2か月間で行われ、1ヶ月ごとに1年生は各日5名ずつ参加した（計10名）。時間は12時15分～13時までの45分間で、場所は、子どもたちや保護者が普段遊んでいる部屋とは少し離れた場所にあるプレイルーム2であった。

3. 身体計測の実施

2年生は身体計測実施に向けて「遊びながら楽しく計測が終わる」ことをテーマに環境構成を行っている。子どもたちは部屋の入口付近で、測定日と身長・体重が記載できる「成長カード」の中から好きなデザインのものを選んだあと、床に飾られた線路に沿って歩いていくと測定器があり、そこで計測を行う、という内容になっている。身体計測の実施の様子を図1に示す。



図1 身体計測時のプレイルームの様子

実施当日、1年生は実習などでも使用できる手作りの名札を付け、エプロンを着用し、参与観察に臨んだ（外見からは学年の差が分かりにくい）。教員は参与観察をする1年生ができるだけ緊張がほぐれるような声かけをおこなった。また、きょうだいが計測中の保護者に声をかけ、1年生が教員の指導の元、赤ちゃんを抱っこさせてもらったり、遊んだりしながら、少しでも子どもや保護者と関わられるよう

なきっかけを作ったが、基本的には1年生が自由に動き、関わり、感じることができるよう心がけた。

4. 実施後の振り返り

身体計測実施後、2年生(12名)、1年生(5名ずつ)と教員(1名)を交え、実践に関する率直な感想を伝えあった。その後、1年生には参与観察を行って①先輩の姿をみて感じたこと/思ったこと、②自分を振り返って感じたこと/思ったこと、③感想等、という3点を自由記述様式で記述させ、3日以内に提出するように求め、意識的に振り返りができるようにした。

Ⅲ. 結果と考察

参与観察の1回目は28人、2回目には21人の子どもたちが身体計測を行った。身体計測実施直後には2年生と1年生が簡潔に感想を述べ合う機会を設け、2年生は1年生をみて「私が1年生の時よりもしっかりしている」「子どもと関わるのが上手い」と1年生の姿を肯定的に捉えていた。また、1年生は「1年後の自分が、今の先輩のようにできる自信がない」「すごい」と伝え、1年後の自分の姿を想定できていない、先輩の姿に圧倒されている様子がうかがえた。2年生はそのような1年生を見て「大丈夫だよ」「実習で鍛えられる(から大丈夫)」など、1年生を安心させるような言葉かけをしているのが印象的だった。1年生の課題であった振り返りレポートは期日内に全員が提出した。

1. 1年生は先輩のどのような姿に着目していたのか - ①先輩の姿を見て感じたこと/思ったこと-

1年生は、振り返りレポートの中で、先輩の身体計測における活動の姿を見て感じたことや思ったことを自由に記述した。その結果、33の記述がなされ、それは表1のように分類された。

表1 先輩の姿をみて感じたこと／思ったこと

全33記述		
注目カテゴリ名	件数	記述の例
遊び・あやし方	15	<ul style="list-style-type: none"> ・人形の使いかたが上手 ・人形を使って子どもの意識を引き寄せていた ・手遊びを通して気分を高める ・線路を使ってそれぞれの場所に子どもを導いていた ・立ってほしい所に足跡の方をつけて興味を持たせる ・ぬいぐるみやおもちゃを使って誘導していた ・なかなかできない子には興味を示すようなことをしていた ・子どもの興味を引くような遊びを行っていた ・泣かないようにアンパンマンやうーたんを使ってあやしていた ・おもちゃを使って身長・体重を量っていた ・子どもが動いてしまっても測定ができないときに、おもちゃを使って誘導させたり、気を引かせるために言のなるぬいぐるみを使ったりして工夫して勉強になりました。 ・子どもの興味を引いたり楽しませるのがすごいと思った ・恥ずかしがらずに大きな声で手遊びをしていた ・楽しく測定ができるように工夫していた ・その子の好きなものを使いながらうまく台に載せていた
行動・対応	5	<ul style="list-style-type: none"> ・進んで子どもに関わっていた ・手をまわいて子どもたちを誘導していた。暴れてしまう子には人形であやしたり、子どもを抱きかかえて安心感を持たせたりしていた* ・動きが早い(子どもがいやがらないように) ・次の身体計測に行かない子の移動や対応がとても上手だった ・なるべく早く測定できるようにしていた
コミュニケーション	5	<ul style="list-style-type: none"> ・笑顔・コミュニケーションをたくさん取る ・小さい子と話すとき、同じ目線に立って話したり、手を握ってあげたりほっぺを触ってあげたりと多くのコミュニケーションをとって実習などに行ったとき、役立っと思いました。 ・声のトーンや表情が明るく、子どもの目を見て話している ・笑顔をやさしいようにしていた ・大きな声ではっきりと短文で会話していた
声かけ	4	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの気を引くためにぬいぐるみや小道具を使って呼んでいた ・出来たら「すごいね」「えらいね」声かけが多かった ・子どもたち1人1人の状態に応じて声かけをしたり、興味を示すためにおもちゃを使ったりと工夫して関わっている姿がすごいと思った*
その他	4	<ul style="list-style-type: none"> ・出来たらすぐにほめる ・来たこの身長・体重を書くカードがとても凝っていてかわいかった ・カードにオリジナリティをつけることで、自分で渡したいという子がいた ・保護者の対応がとても丁寧 ・保育士みたい

*遊び・あやしの内容を含む

参与観察を行う中で、1年生が最も注目していた先輩の振る舞いは子どもとの遊びかた、子どもとの【遊び・あやし方】であり、全33エピソード中、15項目と多かった（*他のカテゴリと混在した内容も含めると17項目）。特に、人形やおもちゃを使って遊ぶだけではなく、子どもを誘導したり、気分を高めたり、気を引かせるために用いていたことに関する気づきの内容であった。

次に多かった内容は【行動・対応】【コミュニケーション】の項目であり、進んで子どもたちに接している様子や、身体接触（抱っこ・笑顔など）、子どもとのコミュニケーションの取りかたを観察したものであり、具体的にどのように声をかけ、遊び、子どもや保護者に関わっているのかを観察していたことが記述から明らかにされた。

2. 1年生は参与観察を通して何を感じたのか-②自分を振り返って感じたこと/思ったこと

1年生が行った自分自身への振り返りの結果は表2で示す。身体計測実施直後に2年生と1年生が簡

表2 自分を振り返って感じたこと／思ったこと

全33記述		
注目カテゴリ名	件数	記述の例
出来た・うれしい感覚	10	<ul style="list-style-type: none"> ・笑顔で子どもたちに接することができた。ぬいぐるみを活用できた ・はじめのほうは座ってみているだけだったけど、自分は入口近くにいたので、入ってくる子に挨拶したり、靴を脱ぐのを手伝ったりできた ・2人の男の子と一緒に身体測定をすることができました ・後半は色々な子どもと関わって誘導したり、子どもと目を合わせて笑いあったりして、子どもと沢山関わるすることができました。 ・今日来てくれた子どもたちの1人ひとりの性格や特徴も見てわかる部分もあったので、その少し理解できた部分を生かして1人ひとりどう関わればいいのか、今後の実習の際、実践できるようにしたいです。 ・6か月の赤ちゃんを抱っこしてもらったときに、体を揺らしてあげたり、目を見て声をかけてあげたりすることができました ・1人の男の子はすごく素直に体重や身長を測ってくれて「ありがとう！バイバイ」と言ってくれてうれしかった ・最後に子どもがハイタッチしてくれて、うれしかったです ・子どもに近づいても子どもは自分の世界にいて遊んでいるから打ち解けるのが難しかった。けれど、隣で話しかけ続けたらおもちゃを渡してくれてうれしかった。子どもがカメラのおもちゃを渡してくて、シャッターを押すのを見せたら、子どももシャッターのボタンを押して、楽しんでいたらうれしかった ・もう1人の男の子は測定器から離れた場所において「いやいや」って言うんだけど、磁石を使って楽しく遊びながら測定器のほうまでつれて来れた。その流れで身長計に乗ってもらうことができたので、とてもうれしかったです！
困難・分かなさ	9	<ul style="list-style-type: none"> ・なかなか測定できない子を動かすのは難しい ・話しかけてもこたえられる年齢じゃなかったので、感情を表現などから読み取るのが難しかった ・遊んでいる子どもに対する声かけやどこまで手助けしていいのか分からず接し方が難しかった ・基本、身体計測じゃないほうで小さい子と遊んでいたけれど、年齢によって興味のあるおもちゃなどが違ってどれで遊ぶか考えるのが大変だった ・何をすればいいのか分からなかった ・はじめは何を自分でしていいのか分からなかった ・最初はどのくらいいいのか、どう接すればいいのか全く分からなくて何も動けずにいた ・最初は何と声をかけていいのか分からず、子どもに声をかけることができなかった ・抱っこの仕方が分からない
子どもへの気づき	4	<ul style="list-style-type: none"> ・手をにぎって口にもっていた ・1歳～1歳半くらいの子は少し嫌がる傾向にあると思いました ・子どもとどう関わったら子どもの興味が薄くかがだんだん理解できました。 ・手伝えることはできずにただ見ていただけだったけど、子どもと対話するときに視線を同じ高さに、目をちゃんと合わせることが大切だと思いました
子どもの可愛らしさ	3	<ul style="list-style-type: none"> ・抱っこした時とてもかわいかった ・初めに抱かせてもらってとてもかわいかった。予想していたより体重が軽かった ・子どもめっちゃかわいい
反省・改善	3	<ul style="list-style-type: none"> ・先生に言われないと動けなかった ・積極的な関わりができなかった ・線路が所々にしかなくて、そこから動かたくないというこがいたので、線路をつなげたほうがよいと思った
保護者への気づき	2	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者さん、とてもしっかりしていた ・あるお母さんが身長台に乗りたくないと言っている子に磁石を持ってきて身長台にうまく引き寄せさせていた。これからも使える案
モデルとしての先輩	2	<ul style="list-style-type: none"> ・先輩のようにもつと声をかけたり、積極的に関わるのを目標にしたいと思った。 ・体重を測りにいって子がずっと身長台のほうにいてしまったとき、身長台のほうに体重計を移動させたりして、臨機応変な対応を見習いたいと思いました

潔に感想を述べ合った場面では、【困難さ/分からなさ】が中心に述べられていたため、記述が多くなることは想定できたが、学生自身が振り返ったレポートでは、このような分からなさに戸惑うだけではなく、自分が実際に子どもたちと関わることで【出来た・うれしい感覚】も同時に感じられていることが確認された。このことは、困難さや分からなさが解消されてから親子に関わるのではなく、分からない中で関わった結果、出来た・うれしいという感覚が得られたということであり、1年生には1年生なりの学びがあるとも言い換えられる。分からないけれど、出来た、子どもの反応にうれしい・可愛らしと感じている様子が記述からは伺える。

また、1年生は身体計測を実施するのではなく、その周辺に身を置くことで、子どもの発達やコミュニケーションの取り方などの【子どもへの気づき】につながっていることが考えられる。振り返ることで、もっとこうすればよかったというような【反省】もあるが、先輩や子どもを観察するだけではなく、身体計測の場に参加していた保護者の様子についての記述も見られた。このような保護者に対する学生の素朴な思いは次の③自由記述の中で多く示されているため、次節で検討を行う。

3. ③感想等について

学生の感想等の内容は表3に示す。1年生は参与観察にあたり「できるだけ子どもたちや保護者の方と触れ合ってみること」と教示されていることから、保護者との関わりについて言及した内容が多かった。全15記述のうち、7項目が【保護者との関わり・保護者のすごさ】について述べられている。

表3 自由記述

		全15記述
注目カテゴリ名	件数	記述の例
保護者との関わり・保護者のすごさ	7	<ul style="list-style-type: none"> ・親さんが身長を測る時に気をそらすために三角とか四角の磁石を使っていたのがすごかった ・親さんは子どものこのことをよく知っているの、知恵がすごいと感じた ・お母さんが遊び道具の中から磁石を持ってきて興味を引かせていたことを見て発想がすごいなと思いました ・お母さんが身長を測ってくれない子どもに対して身長測定機に磁石を貼って興味を持たせて子どもを誘導していたのを見て、子どもがどうしたら計測できるか工夫して誘うか参考になったし、知識や工夫、子どもの気持ちが大変だと改めて感じられた ・赤ちゃんを抱っこするとき、よく片手で赤ちゃんを抱っこして、片手は上の子の手をつなぐお母さんを思い出して赤ちゃんを両手で抱っこしても重たいのに、片手で抱っこしているお母さんはすごいなと思いました ・保護者の方と色々な話をする中で子どもの状況がよく分かるし、新しい発見もあると思いました。 ・片手でお母さんたちが子どもを抱っこしているのにすごいと思いました。両手で抱っこしたのも重かったのに尊敬した。
子どもへの気づき・子ども理解	3	<ul style="list-style-type: none"> ・男の子が電車ごっこをして遊んでいて、すぐに飽きて違うことをするだろうなと思っていたけれど、帰るまでずっと同じことで遊んでいて、そのような子もいるんだなと分かりました ・子どもはとてもかわいいけれど、近づいてきてくれるばかりではなく、背中を向けられたりするけれど、心を開いてくれたらうれしいので、声かけや接し方をこれからの実習やくれまちすに遊びに行く中で学んでいきたいと思った。 ・抱っこした時、意外と泣く子が少なくお利口な子が多くて驚きました。泣きそうでも揺らしたりすることで収まったりしたので、すごいと思いました。
反省・改善	2	<ul style="list-style-type: none"> ・床の線路が剥がれてしまうからつけ方を変えたほうが良いと思った ・まだ動ける場面があったので積極的に頑張りたい
その他	3	<ul style="list-style-type: none"> ・(自分の)名札のどきんちゃんに興味を持ってくれる子がいてうれしかった ・みんなの動きを見て勉強になったし、自分も取り入れたい部分があって危機感が湧いた ・子どもたちがとてもかわいかった

表3において何人かの学生が指摘している磁石を使って身長を測ろうと誘導していた母親のエピソードを下記に示す（エピソード1：身長計にマグネットをつけるお母さん）。

身長計や体重計は痛みを伴わない測定なのだが、実際は保護者と離れるだけで泣いてしまったり、見知らぬ人の存在や馴染のない場所で行われる計測は、不安を感じさせてしまったりする場合がある。身体計測は、子どもが自分から「測りたい」、もしくは「測りに行きたい」、と思うことはまれで、多くの場合、保護者の希望で測定を行う。「くれまちす」職員より、「(子どもが) イヤイヤ言っているときには無理矢理測らなくても、その内、成長したら測定できるようになるから、大丈夫」と保護者や学生に伝えられていることもあり、学生が子どもの身体を無理に抑えつけて測定することはない。そうとはいえ、体重計は家庭でも測定できるが、身長は家庭で測定することが難しいので、身長だけでも測って欲しいと依頼されることがある。また、測定を行う学生が「せっかく測定にきてくれたのだから、子どもが『できた』と思って帰ってもらいたい（2年生）」と活動中に語っていることから、時間の許す限

り、できるだけ子どもの気持ちに寄り添う活動をしている。

このエピソードに出てくる女兒は「くれまちす」の身体計測に初めて参加することもあり、緊張も強かったと考えられる。そういった中、2年生たちも、強引に身長を測ろうとせず、しばらく一緒に遊んだりして女兒の気を紛らわせている様子が伺える。

エピソード1：身長計にマグネットをつけるお母さん

2歳女兒。母親と一緒に初めて身体計測の部屋にやって来た。学生たちが「こんにちは～」と声をかけると、自分で歩いて部屋の入口付近でカードを選び、にこにこ笑顔でご機嫌な様子。身長計担当の2年生が「こっちだよ～」と声をかけると、計測器の近くまで行くが、台には乗りたくない様子で、学生の持っているぬいぐるみを触ったり、音のなるおもちゃで遊びはするが、なかなか身長計に乗らない。体重を担当する学生が、「じゃあ先に、こっち（体重）に乗ろうか」というと、体重はすんなり測定完了。2年生は「すごいね」「イエ～イ」と女兒とハイタッチをする。

「じゃあ、次はこっちだね」となった途端、女兒は「イヤ～」とぐずりだす。「こっちだよ」と人形を使って誘うが、女兒はその場から動こうとしない。その様子を見ていた女兒の母親が、学生の持っていたマグネットもおもちゃを使って、身長計の尺柱に「ほら、くっつくよ！すごいね～。○○ちゃんもくっつけてみる？」マグネットを付けて遊んで見せた。すると、女兒もやってみたいと思ったのか、自ら身長計の台に乗って、母親や2年生と一緒に尺柱にマグネットくっつけて遊び始めた。2年生は女兒が遊びに満足したところを見計らって身長を測定した。女兒の測定ができたとき、部屋の中で拍手が起こり、母親と学生はお互いにお礼を言い合っていた。女兒はしばらく母親・2年生とマグネットで遊んだあと、「バイバイ～」と手を振って退室した。

母親にとっては、自分の子どもと遊んだり、子どものご機嫌をとったりすることは日常の中の1コマなのかもしれない。このような自然な子育ての姿に触れられる機会が、「くれまちす」にはあり、そこから学生も学ぼうとしていることが分かる。きょうだいで「くれまちす」を利用している母親が両手に子どもを抱えて移動する姿を間近で見た学生にとって「お母さんってすごい」「尊敬する」という対象となっていることが分かる。竹之下・馬見塚（2016）は、「子育て支援活動」ひろば実習に参加した学生の感想として、幼稚園とか保育園だったら、お母さんがどう接しているのかが分からないけど、広場では関わり方が分かるし、やり取りとかがみられるとか、お母さんの内面が、全部は見られないかもしれないけど、見られる気がする⁴⁾と、示している。保護者（お母さん）がどのように子どもを扱うのか、また、具体的なあやし方を見る中で、実習未経験者である1年生は上級生である先輩からだけではなく、保護者からも子どもの対応について学んでいることが、振り返り記述から明らかにされた。もちろん、活動を通して1年生同士が刺激し合っている記述（みんなの動きを見て勉強になったし、自分も取り入れたい部分があって危機感が湧いた）も見逃せない。このような記述は1つしかなかったものの、集団の中で自分の状態を理解し、受け身の姿勢ではなく、より主体的に取り組もうとする意欲が感じられる。

IV. 総合的考察-今後の課題-

保育士養成課程において、保育実習や幼稚園教育実習、施設実習などは保育士資格や幼稚園教育免許状取得のための必須科目であるが、地域子育て支援に関しては、必須科目として保育士養成課程の科目に加わっていない。そのため、学生が地域子育て支援について実践的に学ぶ機会が少ない状況にあることが報告されている⁵⁾。實川・砂川⁵⁾は、近年の保育者養成校で地域子育て実習の取り組みをまとめた上で、学生は保育環境、幼児理解、支援者の役割や職務、アタッチメント形成過程や保護者支援、支援者としての学生の意識変容など、多様な学びがあることを明らかにしている。その一方で、学生の保護者理解が不十分であることや、学生が保護者とのかかわりにおいて困難を感じていることも指摘している。その上で、学生が地域子育て支援における保護者との関わりを経験する機会を確保するとともに、学生が困難を乗り越えたり、対処方法を学んだりできるような指導の必要性が強調されている。「くれまちす」は、大学主催の子育て支援事業という枠組みの中で、上級生、大学教員、くれまちす職員、地

域の子育て中の母親という多様な構成員の中で、最も周辺的な地位から地域での子育てという文化的営みに参加していたと考えられる。少し上のロールモデルとして先輩をみながら、その先には、活動の場を運営しつつ母親を支援する大学教員とくれまちす職員がいて、さらに最も中心的な部分に子育ての直接的責任を負う母親ともかかわることができるのである。この段階的でかつ周辺的でありながらも正当な子育ての場への参加⁶⁾が、上述の多様な学びの機会を与えているものと考えられる。

学内で子育て支援事業を行う場合、学外で参加させる場合よりも学習サポートがしやすい利点が大きいと報告されている⁷⁾。学内の場合、学生を教員が直接観察・指導しやすい、子育て支援プログラムと学生の目的とを調整しやすく、学生自身も継続しやすい、費用や保険の問題が少ないなどの利点が挙げられている。

地域子育て支援における支援とは、豊富な知識に基づく保護者との信頼関係づくりや、保護者理解だけではなく、地域における他職種との連携も踏まえた支援でなくてはならない。しかし、本研究で行っている身体計測の活動は、子育ての難しさや困難さなどを理解したり、共感したりすると支援活動とは異なる。そうとはいえ、身体計測という機会や場は、学生が保護者を素朴に理解するスタート地点として、1年生にとっては近い将来の姿を見ることで、目指すべき方向性や必要な知識・技能を意識化する取り組みとして有効であると考えられた。

注・文献

- 1) 大西 薫・高松みゆき (2018)：地域子育て支援センター「くれまちす」における身体計測の実践―学生の気づきと保育技術の向上に向けた取り組みから―，教育実践科学研究センター紀要，17，165-170.
- 2) 大西 薫 (2018)：学生参加による地域の子育て支援活動の一考察，日本発達心理学会第29回大会，東北大学.
- 3) 入江礼子・小原敏郎・白川佳子 (2017)：子ども・保護者・学生が共に育つ 保育・子育て支援演習―保育者養成校で地域の保育・子育て支援を始めよう―，萌文書林，東京.
- 4) 竹之下典祥・馬見塚珠生 (2016)：学生の地域子育て支援ひろば実習から得られた保育士養成の課題，盛岡大学紀要，33，43-52.
- 5) 實川慎子・砂川史子 (2017)：保育者養成課程の地域子育て支援実習における学生の困難観 - 学生の保護者理解と保護者への関わりに注目して - ，千葉大学教育学部研究紀要，65，327-334.
- 6) Lave and Wenger (1993)：「状況に埋め込まれた学習 - 正統的周辺参加 - 」(佐伯 胖訳)，産業図書株式会社，東京.
- 7) 宮里慶子・岸本みさ子・串崎幸代・辻ゆき子 (2017)：保育者養成校の行う地域子育て支援事業の捉え直し―サービスラーニングの視点から相対的に理解するための試み―，千里金蘭大学紀要，14，73-85.

